

シリーズ第10話



胃がんは、日本人に大変多い病気といわれています。

胃がんそのものは遺伝しませんが、家族の中で胃がんにかかった人がいる場合には注意が必要です。胃がんの発生に最も大きな関わりを持っているのは、「食事」だと考えられているからです。同じ家族では食生活を中心とした生活習慣が引き継がれているため、同じような刺激が胃に加わっていると考えられます。例えば、塩蔵品（塩漬けの魚や肉、漬物など）を大量かつ習慣的に食べると、胃がんにかかりやすくなるといわれています。魚や肉の焼け焦げにもたくさん胃がん性物質が含まれています。また、むやみに熱いものを胃の中に飲み込んだりすることも、よくありません。

胃がんは、胃の内側を覆う粘

膜から発生します。胃の中に住みついている細菌や、食べ物に含まれる発がん性物質など、いろいろな刺激にさらされるため、潰瘍ができたり、がんができてりするわけです。

胃がんにかからないことが一番ですが、かかってしまったら早期発見が治療のカギです。ただ、胃がんは一般的に初期症状が現れにくいといわれています。そこで、内視鏡を使って胃の内側から観察することで、比較的早期に診断することが有効となります。

時々、粘膜の表面に現れず粘膜の深いところを這うように増えていくもの（これをスキルス胃がんといいます）があり、このような場合には早期の診断は難しくなります。

内視鏡検査などの診断レベル



新城市民病院
外科・消化器科

部長医師 金子 猛

が向上して、早期の胃がんを診断できるようになり、進行胃がんに対する手術とは違った、患者さんにとって負担や障害の少ない手術法もいろいろと工夫されつつあります。このため、消化器のがんの中で胃がんは、大腸がんと並んで治りやすいがんの一つであるといわれています。一般に、胃がんの治療を受けても、多くの患者さんが社会復帰できています。

胃がんという病気をよく理解し、早く診断し、自分に最も適切な治療方法を主治医と相談することで、最善の結果を得ることができます。

胃がんを放置すると、胃の壁 vein に進むばかりでなく、胃のリンパ管や血管に入り込んで、リンパ液や血液に乗って胃から離れたところに散らばって行き

ます。胃がんには「リンパ行性転移」（リンパ節に転移する）、「血行性転移」（血管を伝わり肝臓や肺などに転移する）、「腹膜播種性転移」（がんが胃の一番外側の膜を破ってお腹の中に種をまいたように広がる）という3大転移があります。転移してからの治療は、患者さんの負担やリスクが大きくなります。そうなる前に治療できるよう、くれぐれも定期的な内視鏡検査をお勧めします。

口から入れる胃カメラが苦手な方は、鼻から入れる内視鏡検査もありますので、お気軽にご相談ください。

【参考】
日本胃癌学会「胃がんのガイドライン第2版」

